



「パリ通信」古賀さんへの私信

拝啓、学園に囲まれたパリの並木路の秋にも紅葉が枯れ始め、芭蕉の一句が訪れた頃でしょうか。いつも、豊かな奥深い知識と芸術の満載されたパリ通信に感謝します。

11月号（第83号）は歴史と芸術の凝縮と関連など多くのことを学びました。

(1)第一次世界大戦について

①11月11日、凱旋門で、第一次世界大戦終結100周年式典が挙行政、ロレーヌ地方のヴェルダンで、フランスとドイツの合同合唱団により、モーツアルトとサン・サーンスの「レクイエム」が奉納されたこと。

この文中でフランスとドイツが領有を争っていたアルザス・ロレーヌが出てきました。わたしは昔読んだアルベルト・シュバイツァ博士の伝記を思いだし、その患難の中で苦悩する国民の姿を新たに思い巡らせました。

個人的な話しですが、世界史の試験に出た記憶があります。試験の点数は悪かった（おそらく39点だった）のですが、「アルザス・ロレーヌ」と書いたのは、わたしだけであったという苦渋のなかの甘さを味わいました。今回のパリ通信でその具体的な数字を学ぶことができました。（壮絶悲壮なヴェルダンの戦い）

②100年前のヨーロッパではオーストリアとハンガリーが同一の帝国であったこと。ハプスブルグ家の盛衰も思い浮かびました。

③トルコはオスマントルコ帝国で、ポーランドは未だ存在していなかったこと。オスマントルコ帝国の盛衰ですが、こんなに現代に近い時代まであったというのが不思議です。シヨパンのポーランドは悲哀です。

④1914年6月28日から始まったオーストリア・ハンガリー帝国とセルビアとの戦いが将棋倒しのようにヨーロッパの国々を巻き込み、アフリカ・アジアを巻き込んだこと。

(2)スペイン風邪について

①なぜ、「スペイン風邪」と命名されたのか、始めて知りました。

②第一次世界大戦末期に中国で発生したウィルスがアメリカで突然変異をし、感染力の強いインフルエンザ菌になり、兵隊の移動によって、世界中に広まったこと。その死者は5000万人以上と推定され、中世の「ペスト」（3400万人）を越えること。

③沢山の死者の中に、ギュスターヴ・クリムト (1862—1918)、その弟子であるエゴン・シーレ (1890—1918)、ギヨーム・アポリネール (1880—1918)がスペイン風邪でこの世を去ったこと。日本人にも犠牲者は多数いますが、中でも、今、話題の人「西郷隆盛」の嫡男・西郷寅太郎がスペイン風邪で1919年に亡くなっています。

(3)忘れてはいけないこと

- ①「ルイ・ヴィトン財団」が没後100年記念「エゴン・シーレ回顧展」がパリで2019年1月14日迄開催されていること。
- ②戦場に倒れた兵士、空襲や爆撃の犠牲になった民間人、スペイン風邪や戦争で疲弊し病気で死んでいった人々、家族や財産を失った人、戦争孤児など、老若男女を問わず多くの人々を犠牲にした。4世代 (100年) 経った今も学ぶこと、考えさせられること、伝えていかなければならないことが多く残されている。(以上概要復習です)

(4)私見です

- ①エゴン・シーレの絵画は人物がに関する限り、言葉にできません。大戦とスペイン風邪の影響を強烈に受けているようで、その歴史の残忍さが滲み出ています。来年4月下旬から日本でもエゴン・シーレの絵画展が開催されます。



エゴン・シーレ風画景

- ②クリムトの出会い。

15年位前だと思います。日本の若者がクリムトの代表作をプリントしたバッグを持ち歩いているのを見て、長年、嫌悪感をもっていました。ある時、なんの目的もなく、ベルヴェデーレ下宮に入りました。エゴン・シーレやオスカー・ココーシュカの絵を観て更に寒気を感じて、戻ろうかと思っ

て次の部屋に入ったとたん、わたしは叫びました。「これは、なんだ」。係の方から声を出すなと注意されました。クリムトの「接吻」の本物を観たときの驚きは今も新鮮です。そして、日本語の解説を何度も聞き直しました。その時は、本物の凄さに感嘆して日本語の説明はどうでもよかったのです。それから三度見に行きましたが、神聖なもの、救済のようなことが描かれているという解説に納得できていませんでした。今、やっとアガペー (慈愛) とエロスが同時に描かれているように感じるのですが、まだ、これからの課題です。ただ、美しさには驚きました。今度観る機会があれば、又、深い意味が感じられるかも知れないと自分の感性に期待しています。

次に「セセッション」という建物 (こういう機械的な言葉はよくないようですが) の地下にクリムトが描いた「ベートーヴェン・フリーズ」という壁画があります。

《ベートーベン・フリーズ》は1901年にグスタフ・クリムトによって描かれた壁画作品。縦7フィート (約2m)、横幅は112フィート (34m) もあり、重さは4トン。現在、分離派ビルディングの気温管理ができる地下室で常設展示されている。(www.artpedia.jp より引用)

この壁画とベートヴェンの第九を連想するのが、わたしには難しいのです。解説を英語で読んでも日本語でも当然同じですが、西洋人の見方と日本人の見方に違いあるのか、わたしの無知か、感性の無さか、一種の禅問答のようなことをウィーンではよくやりました。

③今、一番好きな絵画について

心移りの激しいところがありますので、敢えて、今と限定します。

古賀さんに教えて頂いたプラド美術館のフランシスコ・デ・スルバランの静物画です。描

かれているのは「もの」ですが、その背後とといいますか、周りに目に見えない「なにか」を感じ、全体を覆う静謐な雰囲気と余白が個の独立と同時に繋がりを現しているように感じます。言葉にすると考えが入りますが、ともかく、この絵は



がきをじっと見つめていますと、落ち着きます。引き込まれていきます。

エル・グレコの一つの絵を求めて放ろうした若い日を思い出していますが、芸術に疎いわたしにも、やっと小さな一歩が踏み出せてような喜びを感じております。

フランシスコ・デ・スルバランの展覧会等ありましたら、教えてくださいませ。

④先日、朝日新聞に毎日掲載されている「折々のことば」に次のような文章が掲載されました。この欄を担当しておられるのは、鷺田清一さんです。1290回目の連載です

「既知」の領域が拡大するにともなって、「未知」の領域が狭（せ）ばまってゆくどころか、逆にかえてそれは正比例的に拡大する（林達夫1896—1984思想家）

鷺田さんの解説

知らない諸事実が見えてくると、従来の理解では説明できないことも増える。それらをも説明できる視点に移行すれば、新たな問題のみならず、すでに解決済みの問題まで改めて浮上ってきて、事態はいっそう複雑になる。優れた科学者がときに宗教へと「転向」したのもここに理由があると批評家は言う。評論集『歴史の暮方』から。

予てから、わたしも「知る範囲が増えると、それ以上に（累乗的に）不知の範囲が増える」と実感し、文章にもしていたのですが、こんな偉大な哲学者も同じ思いを持っておられるのだと知り、その謙虚さに心が動きました。同時に軽々しく何かを書くということにも畏

れを感じ、より正確に、より深く伝えたいと思うと、もの凄い時間と体力がいります。幸い名もない自由人ですので、気追い込むこともないのですが、5月から始めました「わたしの幸せあなたの幸せ」まだ完成しません。あと一步のところで、踏ん切りがつかず、先輩方の協力をいただきながら、年内には入稿したいと思います。

「裏を見せ 表を見せて 散るもみじ」

我が家の小さな紅葉も、日向ぼっこをしたり、風になびいたり、朝毎に一つ一つ地に落ちています。蛇足ですが、この一句、貞心尼は、良寛さんの歌ではないといったそうですが、知って良いのか、知らなくて良いのか。そんな霜月が終わりに近づきました。お元気で！
敬具